

Japanese Association of Trombonists JAT NEWS

第 51 号

日本トロンボーン協会会報 2000.3 発行

事務局: 〒112-0013 東京都文京区音羽 2-2-2-603 プロアルテムジケ内 tel. 03-3943-6677 fax. 03-3943-6659
郵便振込: 日本トロンボーン協会事務局 東京 9-175867

トロンボーンフェスタ優秀作品でそろそろ

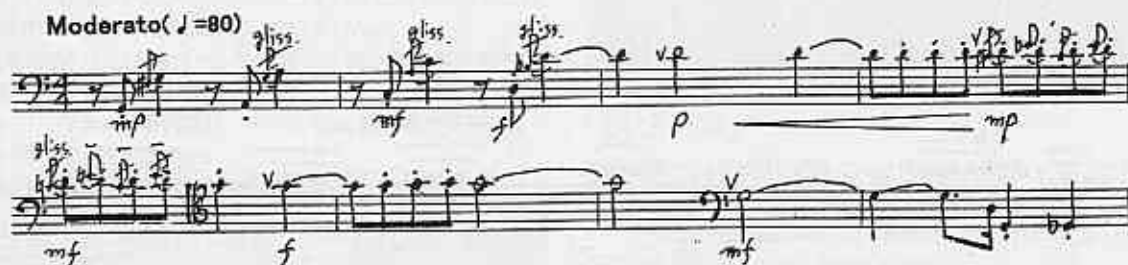
2000年トロンボーンアカデミー&フェスティバルもまもなく。アカデミーのお申し込みはお早めに！今回はフェスティバルのメインコンサートである3月19日「トロンボーン・フェスタ」で演奏される新作を諸面付き！でご紹介します。それぞれの曲を作曲されたみなさんに概要、ききどころなどを解説していただきました。ソロ、トリオ、カルテットから12重奏まで、いろいろな編成のトロンボーンアンサンブルを一夜で聞ける貴重な機会です、有名演奏家の「聞き比べ」もできるガラ・コンサート、ぜひおさそい合わせの上ご来場ください。

作品名: ソロ・トロンボーンのためのディベルティメント

作曲: 小林 新

今回、トロンボーン・フェスタのため作曲したソロ・トロンボーンのためのディベルティメント(喜遊曲)はトロンボーンの特徴を効果的に用いて、演奏される方、聴かれる方共に楽しんで戴けるようにとの思いを重視して書き上げた作品です。内容的にはトロンボーン奏法上の特徴であるグリッサンド、ボルトメントを十分に用い、スタッカットで歯切れの良い軽快さを、弱音器で音色の変化、テンポの変動と同種の音形の再現で曲に変化と統一を持たせました。演奏に当たって個々のグリッサンドが流れに沿って関連して効果的に表現されるのが望ましく、当日、神谷 敏氏による演奏を楽しみにしています。

(演奏: 神谷 敏)



作品名: inquisition / cloister - 野分の門

作曲: 後藤 國彦

トロンボーン最大の特徴は、スライドですね！一瞬にして、またのんびりと(?)伸縮するスライドの不思議なシルエット、鍵盤も指孔もピストンもない「いさぎよさ」が気に入っています。作曲に際して倍音構造や息、声、ミュート、音域やスピードの変化などと同じく、実際のスライドの動きや、そのイメージ＝「すべる」ということ、を意識しました。一方、使っている音の高さ(ピッチ)はかなり少ないです。何を食材に「料理」しているのか明示しなかったし、「ハーモニー」に依存しなかったからです。なお、題名の「inquisition」は「異端審問」、「cloister」は「(修道院の)回廊」、「野分」と「門」は夏目漱石の小説によるものです。

後藤國彦：1964、東京生まれ。作曲を主に田中賢に、また英国立シェフィールド大学にてデイヴィッド＝ハロルド＝コックス、ポール＝アーチボルドに師事。
(演奏：池上 亘)

作品名：リヴァーブを伴うトロンボーン・ソロのための「夜の影 II」

作曲：伊藤 弘之

この作品では、「四分音(半音の更に半分の間隔の音程)」が徹底的に使われています。ふつう1オクターブは12等分されているわけですが、この曲では24等分されているわけです。ですからこの曲は、皆さんがふだん聴き慣れている音楽とはかなり違った響きがするはずですが、美しく響くように作曲されています。全体的にゆっくりと沈んで行くような印象の曲だと思えますが、トロンボーンとしてはとても動きのあるリズムが使われていて、その微妙な変化も楽譜に厳密に書かれています。

特殊奏法は使われていませんが、演奏には超絶技巧が要求される極めて難しい曲です。演奏に際して、曲全体にわたり、かなり長い「リヴァーブ」が電氣的にかけられます。

(演奏：大内 邦雄)

作品名：REQUIEM

作曲：角田 健一

この曲は「武満 徹氏に捧ぐ」という副題が付いており、原曲は1998年に自己のビッグバンド用にジャズスタイルで書いた。今回はトロンボーンとピアノ用に新たに書き今回初演。

曲全体の感じはクラシック風でもあり、ジャズ風でもある。ジャズプレーヤーが演奏するとインプロビゼーションと言い即興演奏(その場で自由に演奏する)の部分を作る場合が多いが、今回はすべて譜面に書かれており、即興演奏とは異なった音楽をつくりだす事が出来るのではないかと思います。

(演奏：箱山 芳樹)

A Lent $\text{♩} = 56$

作品名：トロンボーンとピアノのための「艶艶」

作曲：松下 倫士

この作品は日本の祭りをイメージして作曲した。音域はヘ音記号下のDからト音記号真中のHで中間部のカデンツァでは声とグリッサンドによる重音がある。また、テンポが速く16分音符のスケールはダブルタンギング奏法が必要で、アクセントをつけるのは難しい。途中、5/16や3/16拍子などが入り混じって複雑なリズムになり、ピアノとのかけ合いが面白いを出している。譜面上は5/8だが、旋律は3拍子に聞こえてくる部分もある。

この曲は拍子やリズムも面白いが、西洋の響きとは違った和音が最大の特徴だ。トロンボーン奏者とピアニストの息の合った演奏を楽しんでもらいたい。

(演奏：箱山 芳樹)

作品名：Dancing Bones

作曲：藤井 喬梓

この曲の特徴を一言で言うなら「パフォーマンス」と言うことです。足で拍子を取ったり、声を出したり等、演奏家は普通の音を出すと同時に様々なアクションをしなければなりません。それはまあかなり難しい事ではあるのですが同時にそこが聴きどころでもあります。またジャズの要素もあります。

ダンシング・ボーンズ=踊る骨。曲は「ダイタイコツ」「ズガイコツ」といった言葉が要所所で不気味に発音され、やがてクライマックスへとなれ込みます。さて、踊る骨は最後にいったいどうなるのでしょうか・？ その答えはステージにて！！

(演奏：村田 厚生)

$\text{♩} = \text{ca. } 78$ with (Jazz-) feeling
x : hitting-noise on the I position (tonless)

lento misterioso

bell up

ke i ko tu

△△ : blow air through instr., with indicated mouth-figures

NONO 3 NONO

作品名：システム7(システム・セブン)

作曲：大内 邦靖

1996年ハイパートロンボーンズの自作自演コンサートのために作曲しました。「現代音楽」と呼べるようなものではありませんが、生の演奏を見て聴いてはじめて楽しんでもらえるような作品を作りたいと思って作曲しました。「システム7」とは作曲当時使用していたコンピューターのシステムの名称ですが、この作品はコンピューターという不思議な箱に対するイメージを、7つの音によるテーマをもとに展開した7つのバリエーションです。

(演奏：東京藝術大学トロンボーン専攻 加藤 直明、鳥塚 心輔、有賀 祐介)

♩ = 132

作品名：The short story for three trombones

作曲：川崎 美保

この曲はタイトルが表す通り、トロンボーントリオの為の短い小品です。ごく普通の奏法のみで、音色の変化というよりも、あくまでそれぞれの音のぶつかり合いに重点を置きました。3本のトロンボーンにはそれぞれある一定の音列・音群を設定し、それらを組み合わせさせて書いたものです。あたかも3人の人間が議論をし、それぞれの要求をぶつけ合い、時には譲り合いながらも堂々回りをして、最後には捨て台詞で終わってしまう、という何とも言いがたい、「結論のない議論」とでも言ったらいいのでしょうか、自分達の身近な所によく転がっているようなことをイメージしました。

(演奏：武蔵野音楽大学トロンボーン専攻生 轟木 敬、田中 悠、勝川 本久)

♩ = ca 90
1 con energia

作品名: CLOSE TO THE EDGE

作曲: 伊藤 高明

この曲は1999年6月から8月にかけて作曲しましたが、ちょうどこの頃に目にしたある「抗議文」に影響を受けています。それは都立K高校の生徒会が校長宛に出したもので、強行導入されようとする「単位制」とそこに至る一連の経緯に対する強烈な抗議文で、なかでも強行導入に至る一連の経緯に関する彼らの怒りの心情には大いに共感を覚えました。また同時にそれは、自分自身の十代を想起させるものでもありました。それゆえ、題名はこうしたことへの象徴的の意味合いを込めてプログレッシブロックのYESの曲名を引用して「CLOSE TO THE EDGE」とし、曲全体はこの題名をライトモチーフとして構成しました。

(演奏: 五箇 正明、下島 昌史、田中 宏史)

♩ = 72

A

Trombone 1st.

Trombone 2nd.

Trombone 3rd.

作品名: トロンボーン四重奏のためのイントロダクションとアレグロ

作曲: 早川 正昭

現代音楽で、演奏して楽しく聴いても楽しいという曲は少ない。この曲は合奏することの楽しさを失わずに、トロンボーンにしか表現できない「音の世界」を構築する目的で作曲した。その「音の世界」は、言葉で説明するよりも聴けばすぐわかる分かりやすいものだが、聴く人に、「トロンボーンで、何と素敵な楽器なんだろう。」と思ってもらえれば嬉しい。1960年に、東京トロンボーン四重奏団の委嘱により作曲し、その年に初演された。批評家という人種は、分かりやすい作品を評価しない傾向を持っているが、いつも誉めることのない辛口の批評を書くことで有名だった山根 銀二氏が「この曲は悪くない。」と新聞批評に書いてくれた。

(演奏: レントラートロンボーンカルテット 松村 壮、小金澤 一美、篠松 善孝、関根 一臣)

Maestoso ♩ = 92

Trombone 1

Trombone 2

Trombone 3

Bass Trombone

作品名: Trombone Quartet

作曲: 寺島 正吾

この曲は、基本的には、無調の音楽ですが、完全な無調では、ありません。所々に調性的な部分もあります。調性と無調は、相反する様に考えてしまう人もいますが、私としては、調性あつての無調であり、また、その逆もあるので、無調とは、もしかしたら調性の一部であり一種の転調なのかも知れません。ゆえに両方が、一緒に存在してもいいのではないのでしょうか?

だから私は、調性、無調とかを考えずに自分の感覚でこの曲を書き、結果的に調性的とも無調的とも言える曲ができました。

曲の雰囲気は、スキップするような、ズッコケルような、聴衆、演奏者共に楽しめる曲であり、後半には、グリッサンドを強調した作りになっています。

(演奏：国立音楽大学トロンボーン専攻生 秋永 岳彦、橋本 貴久、田口 友子、榎本 祐士)

Andantino $\text{♩} = 90$

1
Trombone 2
3
Bass Trombone

作品名：12本のトロンボーンのための我楽多祭り

作曲者：松尾 祐孝

プロアマ多くのトロンボーン奏者や愛好家が集まる「フェスタ」のために大勢(12人)のトロンボーン奏者のための作品を書きました。奏者が会場を歩き回ったり、通常の奏法外の現代的奏法も交えたり、聴覚と視覚の両方に働きかけるパフォーマンス的作品となりました。果たして、当日の会場でどのような光景が繰り上げられるのか、楽しみにしててください。

(演奏：東京ミュージック&メディアアーツ尚美トロンボーン専攻生 山崎 明日香、菅野 里美、染谷 智子、滝澤 拓朗、芳我 岳陽、吉田 理恵、関口 暁子、富栄 優、土屋 亘、石井 祐幸、遠藤 充洋 指揮：竜谷 彰一)

[I Prologue]

1
I
II
III
IV (Sax)
V
VI
VII
VIII
IX
X
XI
XII (Sax)

トロンボーン懇親会&トロンボーン協会総会のお知らせ

3月20日のトロンボーンアカデミー終了後、受講生の打ち上げと兼ねて、昨年以來3回目となる「トロンボーン懇親会」を開催します。当日はアカデミー講師も多数出席予定です。他のトロンボーンファンと交流したい！、講師と一緒にアンサンブルしたい！、来年アカデミーに参加したいので情報収集したい！、酒飲んで吹きたい！（成人のみ）、何でもありです！！参加資格はT・B協会会員に限りません。トロンボーンに興味のある方ならどなたでも結構です。クラブやバンドのお友達とお気軽にご参加ください。（初心者も大歓迎です！）

参加者は自分の楽器や、やってみたいアンサンブル譜面など持ってきて下さい。みんなで楽しくやりましょう！！

なお、懇親会に先立って、トロンボーン協会の総会も開催します。（議題：99年度活動報告など）

場 所 北区滝野川会館（アカデミー会場）5階小ホール
（JR上中里駅・南北線西ヶ原駅下車 徒歩10分）
日 時 2000年3月20日（月祝）午後5時～午後8時（予定）
参加費 1,500円（高校生以下は1,000円）
*アカデミー受講生は無料の予定
（アルコール・ソフトドリンク・軽食は主催者側で準備します）
申込み 参加希望者は直接会場へお越しください。

問い合わせ 細谷 E-Mail: hosoya@eiki.thj.tokyo.east.ntt.co.jp
携帯: 0908-678-8070

1999 秋のサンフランシスコ・ラスベガスレポート

PART2

村上準一郎

前号に引き続き 昨年11月にサンフランシスコとラスベガスに行ったときのことを報告します。

3日目はビリー・ロビンソン氏（以下ビリー）が大学（スカイラインカレッジ）で講義があるということで私は彼の自宅の練習室で個人練習をすることにした。その部屋には何本かのトロンボーンケース、なぜかフリューゲルホーン、譜面やマウスピース、ほとんど工具箱となってしまうくらい大きなライティングビューロー等々、色々、エトセトラ、があった。

昼はビリーととんかつ屋に行った。ビリーの居間にはヘリコーンが3本転がっていた。ヘリコーンをみなさんは御存知だろうか。スーザホーンの前身と考えられる楽器だ。バンティングホルンやスーザホーンのように方に棒掛けにして演奏する。

写真にはカウボーイ風の男達がヘリコーンをかたいで横一列に十数人並んでいる。

ヘリコーンにはアルト・テナー・バリトン・バスなどサクソフン族のような種類がある。ヘリコーンアンサンブルの印を認かせてくれた。イギリスのブラスバンドに響きは似ているが 音域は当然 低い。

ビリーはアルペンホルンも持っていた。Ab管はトロンボーンのマウスピースで充分吹けた。初めての体験だった。

ビリーは新たにケースを持ってきた。バストロンボーン用の革のソフトケースだ。中にはバックの50B、セイヤーバルブ付き。普通のバストロとして吹いた後、ケースの中からいくつかのパイプを取り出した。

セイヤーバルブはもともと分解可能だ。それをばらばらにしてパイプをつぎ足して完成した。Ebのコントラバストロンボーンに变身した。私の知るかぎりでは最もコンパクトなコントラバストロンボーンだ。

今から20年前 テネシー州のナッシュビルでのITA（国際トロンボーン協会）のワークショップに参加したとき、ビリーはバックの50Bと42Bとアルトが1つのケースに入るように楽器とケースを改造していた。

3種類のトロンボーンが入ったケースなんて車でないを持ち運べない。どうせ車を使うなら三つ別々のケースでもいいのでは・・・と私は思うのだが。???

2時間はドトミー・バーダソンのバストロ用のJUNETで遊ん

だ。

11月6日未明 ビリーがサンフランシスコ空港へ送られてきた。手続きを済ませて機内へ。スチュワーデスが楽器を荷物室に預けて欲しいというので従った。

窓の外を見るとがっしりとした地上作業員が私のトロンボーンを下げて大事な任務についているようなしっかりとした足取りで荷物室の入り口へ歩いていった。歩き方で分かった。彼は音楽が好きらしい。それにトロンボーンを知っている・・・と。

機械トラブルで2時間遅れ別の機に乗り換えて飛び立った。

ラスベガスまでの景色は砂漠 無毛の大地の連続だ。街に近づいてやっと少し緑が見えた。

搭乗口にはスロットルマシンが並んでいた。ビリーの友人ボブ・ナップ氏とフロイド・ラインハルト氏が迎えに来てくれた。2時間以上も待っていてくれた。76本のトロンボーンコンサートの会場であるネバダ大学ラスベガス校には車ですぐだったが12時からのリハーサルはすでに始まっていた。バストロンボーン奏者は20人ほどいたがバストロの席まで行けずテナートロンボーンのグループに加わった。10代から60～70代まで幅広い年齢層だ。前半はクラシックの練習、主催者でもあるジム・スタイバー氏の指揮で進められた。参加者の半分以上がアマチュアだが、プロ・アマの区別は見ただけでは分からない。一人一人がトロンボーン

奏者として誇りを持っているように思える。アマチュアすなわち習う立場ではない。サンフランシスコのボヘミアンクラブと同様、純粋に音楽を楽しめるという理想的な音楽との接し方をしている人々なのだ。

前半の練習が終わるころ、1人の老人がステージの後ろにやってきた。参加者に親しげに声をかけ、人々からも同様に握手や笑顔が返ってくる。日本で言うと町内会の会長のような親分肌の好々爺だ。

私は「誰だろう このジイサン」と思った。

後半のジャズの練習はトミー・ドーシーの様なスイートトロンボーンの第一人者でビッグバンドのリーダーでもあったサイ・ゼントナーのメドレーからだった。

すると さっきの老人が指揮をしている。指揮はあまり

上手とは言えない。ソリストにどんどん注文をつけている。

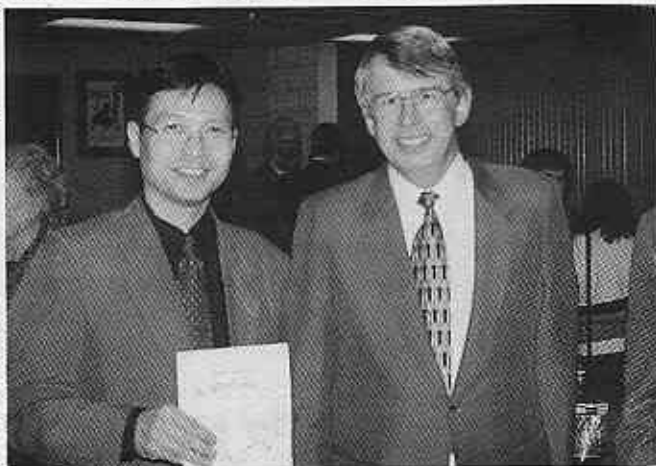
「どうしてこの人が指揮なんてするんだろう」と思った。

翌日 コンサートの終わりに主催者のジム・スタイバー氏がスピーチをした。「ここでサイ・ゼントナー氏の功績を讃え、参加者全員より記念のスタジアムジャンパーをお送りします。サイ・ゼントナーさんを大きな拍手でお迎え下さい。」

あの老人が登場した。

しまった。私は彼のビッグバンドの古いビデオを持っている。がっしりした体格で角張った顔、しかし実にスイートな音を奏でる 私の好きなトロンボーン奏者の1人だった。

心の中で「ははあ」とひれ伏した。黄門様と知ったときの町人のように。



ジム・スタイバー氏（右）と筆者

リハーサルの後半でバストロンボーンの席を1つ見つけ出し仲間に入れてもらった。ステージはそれほど広くないので2人で1つの譜面台を使う。

私とコンビを組んでくれたのはサンディエゴから来たアラン・チャールズワース氏、ヤマハを使っていた。ジョージ・ロバーツが主宰であるボーンズウェスト(BONES WEST)のメンバーだそうだが、他にも十数人ボーン

ズウェストのメンバーがいた。

またビリーが主宰であるサンフランシスコのベイボーンズ(BAY BONES)のメンバーも多かった。

西海岸を中心にアメリカ各地からトロンボーン吹きが集まって来ている。

その日の夜はダウンタウンに近いモーターに泊った。少し休んで街に出た。ギャンブルのメッカ ラスベガスに来たからにはカジノに行きつて一儲けと思ったのだが、カジノに入るとスロットルマシンが並んでいて何となく日本のパチンコ屋と似ている気がした。パニーガールなんてもちろんいない。

ギャンブルはやめて歩いた。フラミンゴロードの高級ホテル ベラッジオの前には大きな池がある。突然フランク・シナトラの歌が流れはじめた。美しくライトアップさ

れたホテルをバックに噴水のレビューが始まった。実によく音楽に合っている。これぞゴージャスというのだろう。一定の時刻になるとさまざまなヴォーカリストの音楽とともにそのレビューは繰り広げられる。

この街は毎晩がお祭りのようだ。観光客で賑わっている。

その人混みの中を自転車がゆっくりとぬてくる。若いボリスマンだ。スプリング付きのマウンテンバイクに無線を載せ黄色のヘルメットとサイクルライダーのジャケット。自転車の中野浩一のようなコスチュームだ。平たんな砂漠の町ラスベガスには理にかなったスタイルだ。

本番当日はモーテルから大学まで歩いていった。街の中心から離れて行くとつぶれたホテルの看板だけが立っている、まわりは砂地だ。歩道も砂をかぶっている。時々まるい金具につまずいた。「なんだこりゃ あぶないなあ」と歩き続けた。

控室に入ると60～70代の紳士が数人楽器をケースから出している。外管を抜いてクリームを塗っている姿を見て、いつまでもトロンボーンを愛し付きあっている人々がこんなにも多く集まれる機会があるのは素敵なことだと思った。

私はウォームアップを外のベンチで始めた。となりの芝生でスプリングラーが水をまいていた。「そうか、さっきの丸い金具はスプリングラーだ。砂地に縁を保つには不可欠なのだ」

感心すると同時に私は近くに丸い金具を探した。楽器に

水をかけられたくないからだ。幸い無かった。

コンサートの前半はクラシック、コンビを組んだチャールズワース氏と磨めくり係りを交代しながら演奏した。

コンサート後半のジャズのステージではサイ・ゼントナー指揮による彼のレパートリーのメドレー。ジム・スタイナー指揮でシカゴのスタジオミュージシャン、アート・ゼアス氏によるトミードーシーメドレー。ニューヨークのトロンボニストでカイ・ウィンディング、アービー・グリーン、ビル・ワトラス等との共演による録音の多いウェイン・アンドレ氏による自己の作品の演奏。20代の若者たちによるセッションなどが行われた。

ここで特筆すべきは アート・ゼアス氏だ。70歳を超えられと思われるのだが音の艶、温かさ、レスポンスのよさ、ダブルハイ Bb まで楽に出すフレキシビリティの素晴らしさ、そして歌心、彼は2度の出番があったが演奏が終わると客席もステージ上も全員立ち上がって惜しめない拍手を送った。

毎年10月か11月の初旬に開かれる「76本のトロンボーンプラス4」のコンサート、初めての体験だったが、みんなで音楽をそしてトロンボーンを楽しんだこと 又、参加する多くの人々と出会えたこと、本当に来てよかったと思う。

今年ももしかしたら行くかも知れません。どうです？一緒に行きませんか？

ビリー・E・ロビンソン氏 トロンボーンアカデミー&フェスティバルに参加

彼はテナーバスのF管の変わりに
G管を使います。
目からうるこの
G管のレクチャーをいたします。
開催日は3月18日か19日で
時間と場所は
朝 受付に掲示いたします。



ドイツトロンボーンの名工 多湖 和男

今回は「スローカー」ブランド（キューレン&ホイヤー）とヘルムートフィンケについて御紹介します。両メーカーともドイツ国内においては、大きな工房であると言えます。また、パーツに関しても外注は少なく、そのほとんどを自社生産によって賄っています。そのため非常にコストパフォーマンスが来ていて、現在でもこの2社のコントラバストロンボーンは1万マルク以下で販売されています。（コントラバストロンボーンはドイツ国内でも東ドイツの一部のメーカーを除けば、マイナーなメーカーでも1万マルクを越えます。）

この2社のトロンボーンの外観は、蛇飾りやクランツが付くスライドが長めの本格的なドイツモデルとは違い、アメリカンモデル的です。しかし、ドイツ管のキャラクターも持ちあわせ、機能・操作性を重視したコンセプトで作られていると思います。他に、アメリカンモデルから持ち替えるときの吹奏感やコントロールの違いがそれほどなく、価格的にも本格的なドイツ管よりもお手ごろですので、ドイツ管のキャラクターが欲しい人やドイツ管へ移行しようと思っていっしやる方の第一歩めの楽器として奨められます。

SLOKAR (Kuhn1&Hoyer)

スローカー・ブランドは、皆様の御存知のソリスト・ブルーニール・スローカーがアルトとテナーを、そして彼の弟子でありスローカー・トロンボーン四重奏団でバストロンボーンを担当しているアルミン・バツハマンがバスを監修し、開発・設計された楽器です。

アルトからバスまで共通するコンセプト・キャラクターは、全音域および色々なダイナミックレンジにおいても均一なレスポンスと音色が得られ、吹奏感をライトにセッティングしてあるので

発音もしやすいです。アルトではテナー管からの持ち替えがしやすいセッティングになっていて、アルト特有の吹奏感（管が短く細くなる分テナーより息の戻り・抵抗感が多くなる）はそれほどなく、テナーに近い感覚で吹くことができます。外観においては、主調節

管のカーブや支柱を独自のデザインにしているのが目に留まります。オプションでは、ヘビーベルやマウスパイプ交換システム、スターリングシルバーのマウスパイプなどが

あります。

Helmut Finke

世界的に金管楽器がヘビー&ラージ傾向の中、それとは違う独自のコンセプトで、現在のプレイヤーのニーズに対応できる機能・操作性と伝統的キャラクターを融合させた楽器製作をしているのがこのフィンケです。

日本ではフィンケについてほとんど知られていませんが、60年代にはウィーンの上流音楽団のために古楽器を製作していた他、日本でもよく知られている有名メーカーのパーツ設計やパーツ供給、納入なども行っていました。現在世界的にはホルン製作の方が有名で、特にアメリカではトリプルホルンが好評を得ていて、J・チェルミナロなどの名手に使用されています。

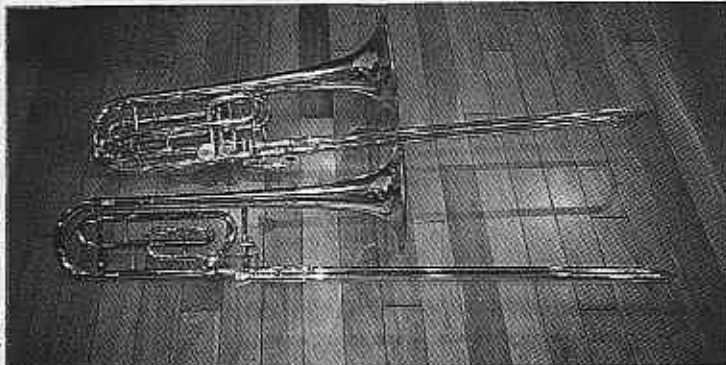
フィンケのトロンボーンは、吹奏感を非常にライトなセッティングにして、音のツボ（トランペット製作のR・モネやJ・カレがいうところの「センター」）がクルスベやヘッケルなどのように広めにあります。また、マウスパイプからベル先までの管の真円度と管厚の均一さを重視したことにより、伝達・増幅機能が向上し、どんなに小さな音の振動にもシャープに反応してくれてクリアに発音でき、到達感（音を遠くに飛ばすこと）にも優れています。

吹奏感がライトで音のツボが広い楽器の特徴は、アタックのニュアンスや音色のパリエーションが豊富で楽に求められることです。ただ、この手のキャラクターの楽器は、（音のツボの）センタリングを楽器自体に依存している人、あるいはセンターがはっきりした、または狭い楽器を吹き続けている人にとっては「ツボ無し」と感じてしまうようです。そして、単なるキャラクター・コンセプトの違いで

自分の好みと合わないだけでなく、楽器のクオリティーがよくないと評価される場合が多いようです。

また、ライトな楽器はフォルテのキャパシティーが低いという誤った認識が日本にはあるようですが、プロフェッショナル機種においては

どのメーカーで作られているライトな楽器であっても、プロのニーズに応えられるだけのものは、当然持っています。フィンケのホルンを使用しているアメリカ人プロ奏者



のジェフリー・ウィンタース氏は「天井知らずのキャパシティー」と語っています。確かに、科学的には楽器をヘビー＆ラージにすればするほどフォルテの限界は広くなりますが、それにともないリスク（労力が必要となり、柔軟性がなくなり、発音しづらく、トーンキャラクターのバリエーションが少なくなる）もどんどん増大していくということが今日では忘れがちです。楽器をヘビー＆ラージにすることでもたらされるメリットの方が多くクローズアップされる今日ですが、（非常にヘビーにすることだけで得られる特殊な音色：極度のダークさや重量感は無理にしても）フィンケのようなライトなコンセプトの楽器でもヘビー＆ラージにしたときと同様のキャラクターがそれなりに求められます。労力なくして同様の効果が求められれば、それに越したことはないと思います。昔のV・バックのマウスピースのカタログの前文にも「最小の労力で最大の効果が得られるもの」という言葉があります。フィンケの楽器もまさに機能・操作性では、このバックの言葉が当てはまる合理的な楽器だと、私は思います。

残念ながら日本ではフィンケの楽器は、この原稿を書いている時点では流通していませんし、私の個人的な見解では好まれないようです。その要因として、第一にフィンケは楽器のクオリティーに関係のないデコレーションを一切廃することでもコストダウンを計っているの、外観的に好まれないこと。第二に、到達性に優れているので「側鳴り」しないため、吹いている本人にとっては自分の響き（音）を認知しづらく感じてしまうこと。第三に（個人的な見解として）フィンケのようなコンセプトで作られている楽器のメリットが、日本ではよく理解されていないのだと思います。

最後に、フィンケのトロンボーンに対しての私の評価は、独自性にあふれたキャラクターではあるがそれなりのクオリティーの高さがあり、ドイツ製にしては安価であると思います。私自身はフルニッケルシルバー製2ロータリーのバストロンボーンと1音上昇ロータリーのついた特殊なバストロンボーンを所有しています。

とろんぼーんなお店情報

「トロムヴォーン」

鹿児島に「トロムヴォーン」という喫茶店が数店あります。トロムヴォーン中町店に行ってみました。昼食時と夜9時前に行きましたが、繁盛している店です。食事もとりましたが、特に女性に好まれそうなメニューです。コーヒークップにも、トロンボーンの記号があります。希望の方には譲ってくれるそうです。1カップ2,000円。6個セットだと都合がいいそうです。店名の由来は、コーヒードのブランド名がトロムヴォーンと言うのだそうです。社長がトロンボーンをやっていたとかそういった理由でしょう。本人には取材していません。

（取材店）トロムヴォーン中町店・〒892-0827 鹿児島市中町4-21 TEL099-222-3368

トロムヴォーン天文館店・〒892-0842 鹿児島市東千石町2-19 TEL099-222-2858

他にも西鹿児島駅前ダイエー内、etc.



「ポザーネ」

トロンボーンのドイツ名 posaune にちなんだ店。スナックというか、しっかりした食事が出るので西洋風居酒屋といったところでしょうか。夜9時過ぎに行ったときには女性客が4名カウンターに座っていました。

店長と奥様の2人でやっています。店長の山口さんがバストロンボーン（今は吹いていない）。奥様はピアノとサックスの生徒を教えています。よく音楽関係の人も訪ねるそうです。上質の焼酎、泡盛、店長の作る食事がしっかりしていますよ。玄関は posaune と書いてある電光看板、トロンボーンのイラスト電光看板、2本のトロンボーンがあります。

営業時間：19:00-5:00

鹿児島市西千石町13-6 宇川ビル1F TEL099-239-6616

取材：伊波 睦

クリスチャン・リンドバーグとの出会い

ホザウネシュトラッセ 村田 秀文

●-出会い-●

3年ほど前に東京佼成ウインドオーケストラのエキストラで初めて出会ったその人と打ち上げて盛り上がった。楽器のこと、音楽の事。お世辞にも流暢と言えないほどたどたどしい英語力の私の話をすごく真剣に聞いてくれる。目の前には萩谷さん、隣にはフレデリック・フェネル氏。まだ駆け出しの私にとってはちょっと酷なテーブルである。初めのうちは『何を話せばいいんだろう・・・』と酒どころではない。実際、店の雰囲気すら記憶にない。萩谷さんに『どどん話していいよ』なんて言われて少しづつ会話を始めた。クリスチャンのハイテンションとだんだんその場の雰囲気にも慣れてきたのも手伝って、もともと嫌いではない(大好きですハイ)酒がすすんだ。話も進んだ。彼のソロを客席で聞いたことを伝えると、『今日の演奏、どうだった?』とクリスチャン、『いや〜素晴らしいかったです。』と私。もうちょっと気の利いたことが言えないもんかなと思いついて、『今回使っていた楽器の音は大好きです。前の音はあんまり好きじゃなかったけど。今度の音は明るくて聴いて、軽くて美しい。そんな絶妙な音がしました。』そんな事を口走った自分が信じられなかった。すると『そう!そう!そうだろう!!自分も前の音は嫌いだったんだよ!今度の楽器はいいでしょ!』って、すごく嬉しそうにはしゃいでいる。ちょっと意外だった。自分等が仲間に自慢するときとおなじリアクションなのだ。『この人もトロンボーンが本当に大好きなんだな』なんて言葉に出来ないほど幸せな気分である。それと一緒にその時自分が忘れかけていたトロンボーンに対する気持ちがよみがえった気がした。その場にいたみんながハッピーな気分になってお開きの時には『クリスチャン!!』『ヒデ!!』とあつひ抱擁で自分にとって信じられないような夜は終わった。

●-再会-●

今年2月16日、一年ほど前から参加しているチェンバースタイルのオーケストラでクリスチャン・リンドバーグをゲストに迎えての演奏会があった。リハーサルは3日間、中一日は別な場所で行う予定があるとのことで初日と最終日だけの合わせである。もともとソロの伴奏でトロンボーンのソロ番はなかったが、リハーサルが過ぎた後で居残りをした。3年前と同じようにハイテンションなリハーサルが始まった。今回クリスチャンが作曲した本邦初演の『曼陀羅草』[MANDARAKE]。シルク・トーンとも言えるゆがみをおそろしくバフフルな音、大きく広々としたフレーズから嵐のように速いパッセージ。チェンバースタイルのオーケストラでは聴いたことのないほどの音を要求してくる。それでもその上をいく付である。とんでもなくエキサイティングな曲だ。狂喜だったのはその後の素晴らしい繊細なレオバルト・モーツァルト。やっぱりこの人は化け物だ。

リハーサルが終わり挨拶に行ったら、3年前の一夜のことなど一年のうちに何百人と顔を合わせるクリスチャンが覚えていてなんて事は考えなかった。名前を覚えて握手をして、『覚えてますか?2~3年くらい前の・・・』まで言ったところでクリスチャンが、『イエス!イエス!ヒデ!!』と思い出してくれた。もう天にも昇る気分である。3年前の事を思い出しながら話に花を咲かせていると、『そうか、トロンボーンのことなのか。じゃあ、『曼陀羅草』はもともとトロンボーン2本とチューバ/バグがあるから今度持ってくるよ。チェンバースタイルで聞いてたから今回持ってきたんだ』と言った。トロンボーンとかチューバとか入ったら面白いだろうなあなんて軽い気持ちで聞いていた。

●最終日のリハーサルで●-その日は午後からソロ合わせ-

昼食から戻ってくるとクリスチャンとマエストロがなにやら話をしていた。挨拶しながら話を聞きながらとすると『持ってきたよ?はい。よろしく!』嬉しそうに顔を渡された。どうやら先日の話は今回の本番の話だったらいい。20分後にはソロ合わせ

のリハーサルである。結構複雑なリズムミックスの曲の練習にバストロの仲間と練習所に駆け込んだ。実は今回、メインのグリーングの交響曲と同じくらいオケ合わせに時間を割いていた大変な曲なのである。うれしい悲鳴なのだが、ちょっと島国味で熱っぽかった体はさらに熱っぽくなり、かわりに具合の悪さなんてどこかに吹っ飛んでいた。人間何でも気の持ちようである。

●本番を迎えて●-紀尾井ホールにて-

クリスチャンは今日もハイテンションだ。ほんとうに尊敬する。色々ハイテンションなプレイヤーは知っているが、こんなにいつも元気な人を私は知らない。そんなハイテンションに引っ張られて次第に自分の具合が悪いこともどこかにいつている。クリスチャンはグネブプロでも一切手を抜くことがない。自分で納得いかなければやり直す。この日のグネブプロでもレオバルト・モーツァルトを2回通した。それでも全く疲れたところを音に出さない。いったいこの人の音はどんな構造になってるんだろう。やはり化け物か。

リハーサルが終わるまでの時間を持て余していると、クリスチャンが話しかけてきた。自分の楽屋に来いというのである。楽屋に行くときAPPLEの最新型のパワーブックがあって自分が作曲中の金管五重奏バックのソロの曲を聴いてくれないか?とヘッドフォンを差し出した。現代曲だった。とてもエキサイティングなおもしろい曲だ。と言うと『そうだ、エクスプロージョン(爆発)だ!』とうれしそうに話していた。それから話はマックの話になりマック談話で盛り上がる。マックユーザー同士だけで盛り上がるのは日本だけじゃなかったんだ。となんだかくすぐったい気がした。

その後話題は楽器の方へ、どうやら私のレッチェに興味があるらしい。楽器を持って来て35年前の製造で、レッチェ本人が作った楽器でとか太鼓でとか、なんて話をするとか興味深そうに眺めて『吹いてもいいか?』と聞いてくる。『ぜひ!』と楽器を手渡してどんな音が出るのか期待して待っていると『ボヘ・・・?ボヘ・・・うへん、ティフィカルト。。。』あまりのギャップにおもわずクリスチャン共々大笑いした。それから『ちょっと自分の楽器吹いてみて?』とクリスチャン。願ってもないチャンスだ。リンドバーグの楽器が吹ける!ちょっと吹いてみて真つ先に感じたことは『軽い!』軽いのである。羽のように。倍音列をいとも簡単に跳躍出来る。自分のレッチェもかなり軽いほうなのだが比べ物にならない。コーンの新しいロータリーバルブシステムも、ドイツ製のロータリーはわりとそうなのだがアクションストロークが短く非常に扱いやすい。シルバーストニックのインナーゴールドベルの音色は私には少しダーク過ぎると感じたが、素晴らしい楽器だった。(3年前は真鍮にシルバーを付けていたが、今回はスターリングシルバー。今回はおなじみのベルの響き止めは使っていないように記憶している。)

1986年から60本のプロトタイプを試した。支柱の微妙な位置で倍音列の鳴りムラが決まる。この新しいロータリーだけでもうすでに8作目だ。と色々なことを話してくれた。ロータリーにはQL2000と刻み込まれていた。QL2000・・・クリスチャンリンドバーグミレニウム?と尋ねるとこれまたうれしそうに自慢していた。これにはちょっと自分もくすぐられた。H2000・・・カッコ付かないか。

そうこうしているうちに本番が始まった。ここで本番の演奏のことについて言うのも野暮だろう。模範相模である。リハーサルに比べて多少緊張していたように見えたが、こんなすごい人でも本番は緊張するんだなあ・・・と安心した。クリスチャンリンドバーグ。ステージ上だけでなく日常の行動全てがエンターテイナー、アーティストのオーラを発している。私の尊敬すべき、また愛すべきトロンボーンプレイヤーである。